Talk Tomorrow 明日を語る

人と事業

大黒柱にこだわり

風土・気候の中で培われた「日本家屋」

ながら・加藤建築（豊橋市石巻本町）の棟梁・加藤泰久さん（52）は、日本の風土・気候の中で培われた「日本家屋」にこだわった大工さんで、建てる家には立派な大黒柱が使われている。加藤さんに日本家屋に対する思いなどを聞いた。

（聞き手・本多亮東愛知新聞社社長）

棟梁の加藤泰久さん

社長
加藤泰久さん

—加藤さんは大黒柱にこだわっているそうですね。

加藤　家を支えるお父さんの役割を果たすのが大黒柱です。そしてお母さんが女大黒。2本の太い柱が中心となり、家を支えることで、とても丈夫な家になります。もちろん通し柱や、桁、梁などの屋根組も太い材料を使い、大きな地震が来ても倒壊しにくい住宅が完成します。

伊勢湾台風の渥美半島の様子を以前、父から聞きました。太い大黒柱や通し柱を使った家の被害はほとんどなかった一方で、大黒柱がなく、細い柱を使った家は、1階部分が倒壊するなど、多くの被害が出たそうです。大黒柱を使った日本家屋の家の強さは、伊勢湾台風でも証明されています。

—この大黒柱は、日本家屋の特徴の1つです。ここで日本家屋の魅力を教えてください。

加藤　日本の気候・風土の中で、培われてきた技術がいっぱい詰まっていることです。そして健康にも良いことです。近年はアレルギーや化学物質過敏症などの症状で苦しんでいる方が、木と土の自然素材だけで家をつくる日本家屋に注目しています。

日本家屋に住んでいる子のほうが、マンションに住んでいる子より、医療費が少ないと言われています。これは、日本家屋が健康に良いことを証明していると感じます。

—技術の伝承にも力を入れているそうですね。

加藤　今の時代は効率優先で、柱や土台、桁、梁などの構造材の加工を、プレカット（工場）に依頼するケースが大半です。しかし私どもはあえて、手刻みにこだわり、大工が自ら加工しています。利益だけ考えれば損なことですが、技術を伝承することは、利益を得ることよりも重要だと認識しています。

若者のため株式会社に

—昨年9月に株式会社に組織変更をしたそうですね。

加藤　これから働く若い衆のために、厚生年金に加入するなど、生活基盤の安定のために尽力することも重要です。そのために会社組織にしました。職人や若い衆の生活基盤を整えることも、技術伝承にとり大切なことです。

—株式会社になり利益面はどうですか。

加藤　儲けるのが下手でねぇ（笑）。利益を考えず、少しでも良い材料を使ってあげようと思ってしまいます。材料を乾かすことも重要で、常に多くの材料もストック。結果的に多くの在庫を抱えることになります。利益につながりませんが、より良い家ができれば、私はそれで十分に満足しています。

—あえて自身について「棟梁」と名乗っているそうですね。

加藤　昔の棟梁をいえば、自分で山に入り木を選び、そして家を建てていた。棟梁とあえて名乗ることで、自分を追い込み、技術を研鑽し、より良い家造りにつながればと考えています。

—技能グランプリ大会にも出場したそうですね。

加藤　敢闘賞を獲得でき、自らの技術の研鑽（さん）になりました。大会に出場したことで全国に知人ができ、彼らと切磋琢磨（せっさたくま）することで技術の向上にもつながっています。

—日本家屋は、日本の風土・気候にマッチした素晴らしい住宅だと、加藤さんのお話を聞き、改めて感じました。これからも素晴らしい技術を後世に伝え、日本家屋の伝統を守り続けてください。ありがとうございました。

（取材記事・竹下貴信同営業部ライター、企画・田中健一同営業部次長）

加藤さんが手掛けた日本家屋の立派な門

—今まで建てた家の中で印象に残る建物を教えてください。

加藤　すべてですが、あえてあげるなら、1996（平成8）年に建てた園芸農家の住宅です。木造2階建ての86坪の家で、大黒柱はケヤキの尺2寸（36センチ）角、通し柱は7寸（21センチ）角を使い、とても立派な家です。内装にもこだわっており、1階の和室の天井は、すべて格天井などの飾り天井です。とてもやりがいがある仕事で、完成までに1年かかりました。

—近年は遠方からの問い合わせもあるそうで。

加藤　ホームページを通して、沖縄から大黒柱を購入したい、神奈川から「ぜひ加藤さんに大黒柱のある家の新築をお願いしたい」の依頼が舞い込んでいます。実現するのは難しいケースもありますが、とてもうれしいです。

丸太について説明する加藤さん

太い丸太で組んだ小屋組みは、木と木ががっちりと組み合わさり地震に強い

木を選ぶのに森まで見る加藤さん